愛知淑徳大学
初年次教育部門
〈全学日本語教育〉
広報誌

あっと@JL

全学日本語教育通信

第8号 2015年3月31日発行

@JLとは？

初年次教育部門〈全学日本語教育〉は、学生の日本語運用能力（Japanese Literacy）向上をサポートする組織です。ここから、学内における日本語運用能力向上にむけたさまざまな取り組みを広く発信したいという気持ちを、"@"に込めました。

特集 座談会

対話を重視するライティング支援

ライティングサポートデスク（Writing Support Desk、以下WSD）は学生の文章作成の疑問・悩みの相談窓口です。相談者が持参した文章に対してチューター（大学院生）やアドバイザー（教員）が相談者と対話をしながら文章を修正していきます。実際に学生たちは、どのような場面でWSDを利用し、それによってどのような効果を得られたのでしょうか。利用者の生の声をお届けします。

【聞き手：荒木弘子（初年次教育部門講師）、記録：石田莉奈（初年次教育部門講師）】

前期だけで10回も通っています！（仲辻）

聞き手：本日はWSDを実際に利用したことのある3人の学生とそれをサポートするチューター2人に集まってもらいました。まず、利用者の仲辻さん、平墳（ひらつか）さん、松崎さん、これまでどのような場面でWSDを利用しましたか。

仲　辻：授業のレポート課題が2つあったので、一度利用してみようと思って行きました。今では授業の課題以外（→注1）でもお世話になっています。

平　墳：「日本語表現T1（→注2）」の小論文課題が出てから、これはひとりでは難しいと思って行きました。なにかアドバイスが欲しいなと。

松　崎：「日本語表現T1」の1回目の小論文課題が、自分ではよく書けたと思ったのに点数が悪くて…。2回目で挽回したいと思ったのですが、どうしたらよいかわからず困っている時にWSDの存在を思い出しました。

聞き手：なるほど。利用してみてどうでしたか。

平　墳：チューターのかたと話していくうちに、文章中に必要な情報とそうでない情報とを的確に見分けられるようになりました。それ以降は、情報を整理してから書き始めるようにしています。

松　崎：私は、チューターのかたとのやりとりの過程で、読み手にとって必要な説明が不足していることに気付きました。今では読み手に言いたいことを伝えるために必要な情報の質量を考慮しながら書くようになりました。

仲　辻：私は文章を書くのはとても苦手でしたが、利用した後に筋の通った文章が書けるようになり、利用前と劇的に変わったと実感しました。もっとレベルアップしたくて前期だけで10回も通いましたよ！

平　墳：10回も?!

注1：WSDで相談できる文章の種類

授業の課題レポート、進学・留学・就職関連書類、サークル関係の文章、スピーチ、手紙など、幅広く対応します（小説などの創作は対象外）。

注2：日本語表現T1

1年生対象の全学必修科目。3本の小論文作成を通して大学生として必要な文章表現力を身につけます。

次ページへ続きます ▶▶▶

聞き手：それはすばらしいですね！　しかし、何度も行くと以前と同じ指摘を受けたり、ある程度言われることが予測できたりしそうですが、どうですか。

仲　辻：いいえ、そんなことはないです。今回は自信があるぞと思って行っても、前回とは全く別の視点からアドバイスが得られるので、毎回違った収穫があります。やっぱり見てもらうと違うなと思います。

聞き手：なるほど。チューターのお２人はこのような利用者の声を聞いてどのように思いますか。

山　本：チューターそれぞれの特性もありますが、前回とは別の視点からアドバイスがもらえるのは、仲辻さんが毎回異なる問題意識を持って来室しているからだともいえますね。

小　林：そうですね。私たちチューターは、まず利用者のみなさんがどのように文章を改善したいのかを明確にしてから相談に入るように心がけています。

チューター　大学院文学研究科 博士前期課程３年 小林珠子さん

リピーターが増えると嬉しいです。（小林）

WSDを利用したことで文章力がついていると思うと嬉しい（松崎）

文学部１年 仲辻亮子さん

松　崎：私は毎回、文章の伝わりにくさが気になっていました。WSDに通って文の「係り受け関係」を何度も指摘され、修正することで伝わりやすい文章が書けるようになりました。小論文の評価もアップしましたよ！　WSDを利用したことで文章力がついていると思うと嬉しいですね。

福祉貢献学部１年 松崎佑夏さん

小　林：松崎さんが伝わりやすい文章を書けるようになったのは、自分の問題点が「文の組み立て」にあると気付けたからですね。WSDはチューターが一方的に修正箇所を指摘するのではなく、できるだけ利用者自身で問題点や改善点に気付けるように支援しています（→注３）。

山　本：その成果があったと思うと嬉しいですよね。WSDは利用者自身が自発的に考える場であってほしいと思います。問題点に自分で気付けると、相談を終えてから実際に書き直す際にも役立ちますからね。

注３：WSDの理念

添削はせず、利用者との対話によって問題点や解決策を導きます。書き手はあくまで利用者自身です。

注４：WSDの相談時間

相談時間は原則1人30分までです。

問題を解決するためのひとつの手段。それがWSD（山本）

チューター　大学院文化創造研究科 博士前期課程２年 山本宗由さん

聞き手：ではチューターのお２人から利用者へ、WSDをよりよく活用するためのアドバイスはありますか。

山　本：WSDはあくまで問題を解決するための１つの手段と思って、気軽に来室してほしいです。ただし、「完成したからとりあえず見てもらおう」よりも、問題意識を持って来室した方が効果は高いですね。

小　林：30分の相談時間（→注４）を有効に活用するためには、あらかじめチューターに聞きたいことを明確にしておくと、解決までがスムーズですね。もちろん、文章がすべて完成していなくても大丈夫ですよ。

平　墳：初めての来室では私も不安でいっぱいでしたが、チューターのかたは笑顔で迎えてくれました。安心して緊張がほぐれたのを覚えています。

山　本：そう言ってもらえると嬉しいですね。WSDでは他にも文章力向上のための書籍を自由に閲覧できるスペースがあり、パソコンやプロジェクターの設置もあります。ぜひ相談以外でも活用してくださいね。

聞き手：WSDには様々な利用の仕方があります。ニーズに合わせて活用してほしいですね！　それでは、本日はどうもありがとうございました。

交流文化学部１年 平墳遥さん

「日本語表現」科目以外の課題も絶対持って行きます（平墳）

座談会を終えて…

座談会当日は、活発に意見交換がなされ、大いに盛り上がりました。「書いて表現すること」に対する利用者の熱い思いと、WSDチューターのライティング支援に対する意識の高さとが強く伝わってきました。（荒木・石田）

ズーム!ズーム!!

「日本語表現」全9科目から毎号1科目ずつを取り上げ、授業の様子を詳しくお伝えします。

日本語表現A2〈スピーキング〉

（2～4年生対象）

「日本語表現A2〈スピーキング〉」では、スピーチやディベートを通して、論理的かつ効果的に議論を展開する技術を、実践的に習得します。今回はそのなかから、ディベートに焦点を当て、試合当日の授業の様子と、それまでの準備の過程とをご紹介します。

「日本語表現」科目の全体像

基礎	テクニカルコース	日本語表現T1
応用		日本語表現T2
発展	アカデミックコース	日本語表現A1〈ライティング〉
		日本語表現A2〈スピーキング〉 ← コレ!
		日本語表現A3〈リーディング〉
	ビジネスコース	日本語表現B1〈ライティング〉
		日本語表現B2〈スピーキング〉
	クリエイティブコース	日本語表現C1〈ライティング〉
		日本語表現C2〈スピーキング〉

〈今回のディベートの論題〉

LINE運営会社はLINEメッセージ既読機能を廃止するべきである。是か非か。

準備START!!

1

LINE既読機能の存在が、LINE利用者や運営会社、学校、社会それぞれに及ぼしている影響を把握し、既読機能を廃止した場合に起こり得る事態を予測します。

2

「リンクマップ」を用いて、LINE既読機能を廃止した場合に発生し得る事態を因果関係に従ってさらに予測します。そしてそれらをメリット（青丸）とデメリット（赤丸）に分けます。

〈リンクマップ〉

3

2のメリットとデメリットを重要度・深刻度の順に整理します。

4

重要度の高いメリットと深刻度の高いデメリットをもとに、肯定側立論、否定側立論双方の原稿を作成します。

5週間前 ▶ 4週間前 ▶ 3週間前 ▶ 2週間前 ▶ 1週間前 ▶ いよいよ本番!

試合当日（議論を一部抜粋）

肯定側 チーム オラフ

廃止すべき

- 立論：若者の多くがほとんどの時間をLINEに費やしており、既読機能によって不安を感じたり、猜疑心に苛まれたりするなどストレスを受けている。
- 反駁：18歳の若者の4人に1人が1.5時間以上LINEを利用していることがデータから明らかになっている。
- 反駁：しかし、20代のLINE利用率は80%である。さらに、大学生の45.7%が既読機能を原因とするLINE疲れを感じているというデータもある。

否定側 チーム ネイチャー

廃止すべきでない

- 反駁：「若者」や「ほとんどの時間」の中身に具体性がない。
- 反駁：ということは、逆に言えば4人のうち3人、つまり75%はLINEを長時間使っているわけではないのでは？

肯定側の勝ち!

ー審判の講評ー

両グループともに資料を多く集め、かつ有効に活用していましたね。特に「チームネイチャー」が対戦相手から提示されたデータを別の視点から再分析していた点、また、それに対して「チームオラフ」が新たに別のデータを追加して切り返していた点は見事でした。

ー勝利チームのことばー

チーム オラフ

15分間の試合のために、膨大な量の資料を読み、たくさん話し合いました。こういう経験ができたことが嬉しいです。次回の試合も万全の準備をして絶対に勝ちます！

授業担当者からのメッセージ

初年次教育部門　講師（非常勤）
安田朋江

充実したスピーチは、スピーチには現れない膨大な知識や深い思考に裏付けられています。この授業のディベートでは肯定側と否定側の両方を用意しなければならないので、試合では必ずどちらかの立論が無駄になります。しかし、この「無駄」こそが充実したスピーチに欠かせないのです。今回のディベートでは、受講生全員がこの「無駄」を集めることに没頭したおかげで、初心者とは思えない質の高い試合が実現しました。

※ズームズームは今回が最終回となります。

書く書くしかじか…
学生から、教職員から

文章をうまく書く

交流文化学部講師
山本 理佳

先日、学生に「どうしたら文章がうまく書けるようになりますか？」と尋ねられた。面と向かってこんな質問をされたことが最近なかったので、思わず考え込んだ。私の答えは「私はいまだに自分が文章をうまく書ける人間だと思わない。だから伝えたいことがしっかり表現できているか、何度でも見返して何度でも書き直す。大切なのはどれだけ『伝えたい』という熱意があるかということ」であった。

私自身、大学院時代、教授にどうしたら論文がしっかり書けるようになるかを尋ねたことがあった。教授は「私は1つの論文を書く際、自分で『完成した』と思った時点から、30～40バージョンの修正原稿を作成する。他人の目線・立場で考えると、不明な点、曖昧な点がどれだけでも出てくる。要はどれだけ文章を推敲できているか、これが最低限かつ最重要の論文を書くコツだ」と答えてくれた。

多くの学生を見ていて残念に思うのは、自分の思いや見聞きしたことを言葉で的確に表現するのをすぐに諦めてしまうこと。文章能力云々ではなく、的確な表現ができているのかどうかについて、ぜひこだわってほしい。私自身、あの時の教授の言葉に支えられながら、日々文章と向き合っている。

インフォメーション

受検料が大学負担に！

日本語検定の受検料が無料になりました。

昨年度までは学生負担だった受検料が、今年度からは大学負担になりました。その結果、今年度の受検者数（2級・3級）は大きく増加し、前年度の受検者数105人の7倍にあたる749名が会場に集まりました。

▶平成26年度受検結果（11月8日実施）
【2級のみ抜粋】認定者〈準認定含む〉187 名
認定率〈準認定含む〉33.3 %

☆平成26年度「初年次教育部門教育実践・研究発表会」（通算第３回）開催（3月9日）

初年次教育や日本語表現指導に関する科目の学修内容やその成果を報告する「授業実践・研究発表会」を開催しました。当日は本学教職員を中心に多数の参加があり、学生の日本語運用能力を高めるための課題等を共有することができました。

【第１部】平成26年度授業報告
◎平成26年度「日本語表現T1・T2」実施報告
（初年次教育部門准教授　外山敦子）
【第２部】実践報告・研究発表
◎平成26年度「日本語表現T1·T2」受講アンケートの結果と分析
（初年次教育部門講師　櫛井亜依）
◎「大学の授業を受けるために必要な学力が不足している」とはどういうことか－「新入生学習力調査」によって測定される「学習力」とリメディアル教育－
（メディアプロデュース学部教授・全学日本語教育主任　永井聖剛）

☆平成26年度後期「愛知淑徳大学図書館〈書評〉大賞」受賞者決定（主催：図書館、協力：初年次教育部門・文学部国文学科）

応募総数 165 件、このうち6名が入賞しました。

☆学生の投稿文が『中日新聞』に掲載されました

木戸　真信さん（文学部教育学科１年）
「携帯より顔見て会話を」（2014年11月13日「ヤングアイズ」欄）
河野　夕貴さん（文学部英文学科１年）
「倒した自転車起こして」（2015年1月9日「発言　ヤング」欄）

☆大正大学が本部門を視察されました

◎大正大学教育開発推進センターから来訪された4名の先生に、本部門の取り組みを説明しました（2014年8月5日）。

☆講演依頼を受けました

◎ 大正大学FD研修会（2015年2月16日）
「文章技法の展開方法」
講師：初年次教育部門准教授　外山敦子

《お詫びと訂正》

『@JL』第７号（2014年9月30日発行）「インフォメーション」欄にてご紹介した鈴木萌加さんの所属に誤りがありました。お詫びして訂正致します。
【誤】文学部教育学科　→【正】文学部国文学科

編集後記

巻頭特集でとりあげた座談会では、本部門がライティング支援の一環として開室している「ライティングサポートデスク」の利用者とチューターに様々な意見を寄せてもらいましたが、利用者・チューター双方の発言に「ことばによる表現」へのこだわりと意欲とを感じました。このような意欲ある学生を本誌で紹介できたことを嬉しく思います。　（荒木弘子）

発行年月日　2015年3月31日
編集／発行　愛知淑徳大学初年次教育部門〈全学日本語教育〉
〒480-1197 愛知県長久手市片平二丁目９
TEL：0561-62-4111（代表）
nihongo@asu.aasa.ac.jp